

血液・膠原病・感染症内科

研修プログラムの概要・特徴

概要

研修医は、血液・膠原病・感染症内科の症例を受け持つ。各研修医に1名の指導医を充て、さらにグループ診療を行う。

特徴

研修医はグループ長、医員、指導医らによる小グループに属する。小グループとは別に、疾患担当医による疾患ごとの指導も行われるため、一般内科指導と、疾患に特異的な指導の両方を受けることが可能である。

研修は1ヶ月（4週以上）から可能であるが、1回の化学療法に要する期間を考慮するとできれば2ヶ月以上の研修が望ましい。血液疾患、膠原病、感染症は全身の合併症を伴いやすく、当科での初期研修により内科全般でみられる様々な病態を幅広く経験できる。3ヶ月の研修期間にはほとんどの行動目標、経験すべき診察法・検査・手技（骨髄穿刺、中心静脈カテーテル挿入を含む）が研修可能である。研修期間にあわせてできるだけ多くの疾患をバランスよく経験できるように配慮し、4ヶ月以上の長期研修者で希望者には無菌室管理の必要な急性白血病や自家末梢血幹細胞移植の症例の担当も考慮する。

造血器腫瘍は分子標的療法や化学療法が最も発達した分野であり、抗癌剤の薬理効果・副作用、自家末梢血幹細胞移植や同種骨髄移植について学ぶことができる。また、著しい骨髄抑制を合併するため、輸血療法、感染症の診断及び治療法などを経験できる。さらに、当科の特色の一つであるヒト免疫不全ウイルス（HIV）感染症/後天性免疫不全症候群（AIDS）の診療について、指導医と共にその診断・治療法を学ぶことができる。感染症については、感染制御も含め、研修が可能である。膠原病は、医師として求められる診断のための問診・診察・検査のプロセスを習熟することができる。さらに、生物製剤の登場により治療法のパラダイムシフトが起きている分野であり、最新の診断・治療学を学ぶことができる。造血器腫瘍、膠原病・関節リウマチ、感染症分野はいずれも医師が遭遇する可能性が高い疾患であり、適切な対応を行うための知識を得ることは非常に重要である。入院患者の担当はもちろんのこと希望者は外来診療の陪席などを通して多数の症例を経験することが可能である。

このように、当科では血液、膠原病、感染症領域のより深い理解に加えて、血液領域以外の疾患についても幅広く経験可能である。

研修目標

熊本大学病院内科系プログラムに準じる。以下を目標とする。

- ・患者を全人的に理解し、患者・家族と良好な人間関係を確立できる。
- ・医療チームの構成員としての役割を理解し、保健・医療・福祉の幅広い職種からなる他のメンバーと協調できる。
- ・患者の問題を把握し、問題対応型の思考を行い、生涯にわたる自己学習の習慣を身に付けることができる。
- ・患者及び医療従事者にとって安全な医療を遂行し、安全管理の方策を身に付け、危機管理に参画することができる。
- ・チーム医療の実践と自己の臨床能力向上に不可欠な症例呈示と意見交換を行うことができる。
- ・医療の持つ社会的側面の重要性を理解し、社会に貢献することができる。

研修の方略

指導医、グループ長による指導、各疾患担当医による指導

症例カンファレンスでの症例提示

勉強会、研修会への参加

日本内科学会地方会への参加など

研修実施責任者 血液・膠原病・感染症内科長：松岡 雅雄

研修指導責任者 （正）立津 央、（副）徳永 賢治